

# 難病と共に前へ前へ

「東京がひとつになる日」。こんなテーマを掲げ、東京マラソン（東京新聞など共催）が二十八日に開催される。十回目となる節目の大会の参加者は約三万七千人。「病氣や障害に打ち勝ちたい」「東日本大震災からの復興を後押ししたい」。寒さの残る早春の都心を、前へ前へと進もうとする三人のランナーの思いを紹介する。

## 走春

数日間は左胸に激しい痛みが生じる。階段を上っても息が切れるため、ひたすら横になって安静にしているしかない。

国会議事堂を目の端で捉えながら、都心の坂道で気持ち良くペダルをこいでいた。今日の目標は自転車で皇居を八周。そんなトレーニング計画が、突然の痛みで打ち消された。背中から左胸を、経験したことのない感覚が襲う。刃物で刺されたような…。

二〇一四年五月。東京都港区の主婦高橋志津香さん（三七）は、トライアスロンの練習中に月経に伴って胸を痛めた。月経に伴って胸が縮む病氣だ。一度発症すると、

### 東京・港区 高橋志津香さん



完走を目指し練習する高橋志津香さん＝東京都港区で

## 患者会を知らせたい



TOKYO  
MARATHON  
2016

この病氣は決定打となる治療法が解明されていない。発症時に手術を受けたが再発し、ホルモン治療も副作用を懸念して避けている。発症後、フルマラソンから遠ざかっていたが、六回目の申し込みで初めて東京マラソンの出場切符が回ってきた。「でも、本当に出られるのかな」。痛みが再発しないかどうか、一番の心配事だ。

昨年一月、全国の同じ病氣の患者でつくる「桔梗の会」に入った。会員数は約百二十人。知られていない病氣で、外見だけでは症状を想像できないだけに、分かり合える仲間が存在が心強かった。東京マラソンを目指したのは

「この病氣を知ってもらい、同じ病氣に一人で悩んでいる人に患者会があることを知らせたい」から。幸い今年も一度も症状が出ておらず、近所の公園などで、軽くランニングをして大会に備えている。昔は一日に三十分走ったこともあったが、今は体をいたわりながら、数分走ってコンディショニングを整える。目標は完走すること。「タイムじゃない。楽しんで走ればいい。頭張ればフルマラソンを走ることできると、みんなを勇気づけられれば…」

（松村裕子）